
キモオタを好きになった私

確認のためいっておきますが僕どらえもんじゃないです。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キモオタを好きになった私

【Nコード】

N91680

【作者名】

確認のためいっておきますが僕どらえもんじゃないです。

【あらすじ】

人どおりの少ない夜道を恵美が歩いていると、変態3人組が登場！

「へへへへ、今どんなおパンツはいてるのーしりたいなー」

誰か助けて！そこに舞い降りた私のナイト様はカスを蹴散らしたあそこういった。

「僕がきたからにはもう大丈夫でござるよ！！フヒヒww」

会いたくて震度1

「ふう、今日もお仕事お疲れ様私っと。コンビニでビールでも買ってこようかな。」

今日は金曜日。明日は休みということで機嫌のいい恵美はルンルン気分で家から近い、人通りの少ないコンビニへと向かっていた。

この近辺は住宅街しかなく、電灯も少ないため、お化けがでそうな、不気味な雰囲気がある。

さらに暗闇の広がる角をまがったその時、3人の男が突然不気味な笑みを浮かべながら突然恵美を囲った。

「うへへへ。かわいいおねえちゃんみつけた♪」

だぼだぼのパーカーをきている中央の男が話しかけてきた。スキンヘッドで歯並びの悪い、いわゆるヤンキーだ。背が高く、暗闇でみるそれは、威圧感の塊でしかなかった。

震える声で恵美は言った。

「な、なんですか、私（ビールのみたくて）急いでるんで、どいてください！」

「おねえさん、ちょっと静かにしててくれる？ほんの少しでいいからさあ。ウヒヒ。」

恵美の声はむなしく宙へ散り、ヌツと、中央の男はナイフを取り出した。

「ひっ、お願い、やめて・・・」

「俺だって人は殺したくないよお、おねえさんが抵抗せずに静かにしててくれればいいんだよ。」

そういいながら、恵美のふとももに触れてきた。生温かいザラザラとした手の感触が足に伝い、悪寒がした。

やばい、やられる！誰か助けて・・・そう思った時だった。

「そいやっ！」

突然ナイフを持った男がおうふっ、といいながら倒れた。その後ろに、倒してくれたのであろう一人の男が立っているのが見える。向かい風をバサバサと浴びながらこちらを見つめてくる。ドヤ顔してるのは気のせいだ。

「な、兄貴になにするんだ!!!この野郎!」

そういつてスタンガンと鉄パイプでドヤ顔男に襲いかかった。

しかし、川を泳ぐ魚のように攻撃をかわし、手刀を痴漢者達にうちこんだ。

「ぐはっ」

「ぎゃあああああ」

スプラアアアアアッシュ!!!!プッシャー!!!wwwwwwどうしよう、カッコいい!!!これが恋なの?

恵美はその美貌から男は腐るほどよってきたが、魅力を感じるやつはいなかった。初めて自分をドキドキさせる男性に出会った恵美は動揺をかくせなかった。私、恵美は23歳にして初めて間違いなくフォーリンラブしました。

男がよってくる。

かっこいい。なんと顔もカッコいい。あれだあれ、V6の岡田君に似てる。てかもう岡田君じゃね?本人だろ。

髪をかき上げ、颯爽と男は歩み寄った。すごいクネクネうごいてる。

「大丈夫だったでござるか?いやああぶないところだったですなwwwああやうく食べられてしまうところでした、しかし僕が来たからにはもう大丈夫ですおwww」

恵美は耳を疑った。

ここ現実だよね。ネットじゃないよね。

しかし、一度落ちてしまった恋は拾えなかった。

まあイケメンだしイケメンだしイケメンだし。

「大丈夫です、ありがとうございます！よかったらお礼がしたいので住所とアドレス教えて頂けますか？」

「うはw w w w w w テラ電車男w w w ナイス展開めぐりめぐ夢物語ひろがりんぐw w w w もちろんおkでしゅw w w むしろw w w むしろ、むしろこちらから教えたいw w w フヒヒw w w サーセンw w」

こうして私たちの生活がはじまった。

会いたくて震度2

家について、予定通りビール片手にTVをみていた。

今日はいいことがあった。このビールが飲み終わったらメールしよう。

仕事終わりのソファで飲む酒は格別にうまい。まるで深海で漂っているクラゲのような気分になれる。

そしてまだ3分の2ほどはいつていた500mlビールを一気に飲み干し

「ふはあーうつめえなこいつぁ。最高だぜ。」

など、おっさんみたいなことを呟きながら携帯をとりだした。

件名

恵美です（キラキラ）

本文

不審者から助けていただきありがとうございました！

あの時助けていただけなければ、今頃私は・・・（泣き顔文字）
すっごいかつこよかったです（ハート）

かなり鮮やかな動きでしたね（笑）格闘技を習っていたんですか？

それと、いきなりメールアドレス聞いてすみませんでした（汗）
お名前を教えていただけるとうれしいです（笑顔文字）

よっし、と。女の子らしくかわいい絵文字もつかったし。こんなも
んかな。返信楽しみー♪送信つと。

携帯「くれないーにそつまあたあああ この俺をーーー!!」
きたきた。

件名

Re..恵美です（キラキラ）

本文

いやはや、当然のことをしたまでですおwwwむしろ日課ww毎日
wwwウェwwwウェww

格闘技なんて習ったことはないけど、アニメで研究して独自に開発
してます（キリッ
今日使った技は北斗柔破斬という、とても危険な技なんですよ、マ
ネしないでください（キリッ

いえ、こちらこそ大変うれしゅうございましたwwwあざっすww
wむしろあざっすwww

名前はRomuska Palo Ur Laputaですおww
wmスカ大佐、と呼んでくれた時にはもう僕ぼくのスモールサンダーマ
ウンテンがスプラッシュwwwwwwwwwオウフwwwドクシュ
wwwwwビクンwwwwwwwww

キ・・・キンモー（笑）すさまじいな・・・。だがしかしイケメン、
イケメン、イケメン。

しかも、痴漢からみずしらずの私を助けてくれるんだから、いい人
には間違いない。

多少ネットとリアルが切り離せてないことぐらい、ただしイケメン
に限るを使えば、別に問題ない。問題ない。自分にいい聞かせるん
だ。

件名

返信ありがとうございます！

本文

日課ってことは、よく痴漢や不審者を捕まえてるんですか？素敵
です（キラキラ）

アニメで研究しただけで身につけられるってすごい才能ですね！
他にどんな技ができるんですか？（パンチ）

良かった、嫌われたかなって思ってたので安心です（ハート）
ロムスカ・パロ・ウル・ラピユタっていうんですか？長い名前ですね！

ムスカ大佐さんですね、了解です（笑顔文字）
ムスカ大佐さんの趣味ってなんですか？

よし、うまく普通の会話にもっていった。私天才かも。

携帯「とめられーるやつうはああああ もう いないいいいい」

件名

スプラアアアアアアッシュ W W W W W W W

本文

いや、自分金をもらって働いたら負けだと思っているので W W W 自宅警備も飽きたので最近はご近所警備してるんでござる W W W

他にも二重の極み、メガトンキック、狼牙風風拳、終焉へ誘う獄炎の闇など、あげたらキリないほどたくさんできますお。

最近かめはめ波が少しでました（キリッ

[illegible]

僕を殺す気ですか恵美殿
 モユスｗｗｗｗジャンヌｗｗｗｗ
 M o t t o ! ! ! M o t t o 呼んでください
 最高つすｗｗｗｗｗｗｗｗ
 フィーバーｗｗ

趣味はたくさんありますね。アニメ鑑賞、マンガ、同人、当方、2ch、ニコニコ、鉄道、幼女鑑賞、アニソン、声優、キャラソン、プラモデル、働く車シリーズ、シルバニアファミリーシリーズ、コスプレ、その他大量です。

ふう、イケメンイケメンイケメンイケメン、よしOK。全然許せる。むしろこんぐらいのが飽きなくていいかも。うふふ。おっとイケメンイケメンイケメン。なんとかデートに誘おう。

件名

ムスカ大佐さんへ（ハート）

本文

働いたら負けってすごいルールですね（驚く顔文字）

それなら私は敗北者です（カミナリ）

いろんな技が使えるんですね！なにかあったらまた守ってくれと嬉しいですよ（二重ハート）

多趣味ですねー！私も昔シルバニアファミリーやってみました。よければ差し上げますよ→→

ムスカ大佐さん明日空いてますか？今日のお礼がしたくて（汗）
よければお茶に付き合っていただけませんか？お願いします（土下座）

結構がつついたけど、こんぐらいしても多分大丈夫よね。

携帯「もう二度と 届かない この思い！！」

件名

きのこの山とたけのこの里どっちが好きですか？

本文

いえ、人それぞれ価値観は違うので、恵美さんが働いてる〓負けとは思いませんよ。あくまでも、僕が働いたら、それすなわち負け、というだけです（キリッ

まあ封印されし蒼龍神の右手と、慟哭の十六夜によって覚醒する漆黒の左眼を解放しなければ、僕は理性を保てますから、どんなやつがきても守ってみせます。ただ、もし封印を解かなくてはならない事態にまで陥ったとき・・・その時は僕をおいて逃げてください。ターゲットどもは必ず倒しますが、そのあとに恵美さんまで襲ってしまうかもしれません。

マジでかw w w w w w w w w wシルバニアをいただけるw wなんてw w wまさかの神展開k t k r w w w w w w w w w k t kで夜も眠れませんかw w w w w w

明日は週5回ある自宅警備の日でしたが、雇い主に許可と特別いただいてきますね。

レディのお誘いを断るなんて変態という名の紳士としてあるまじき行為ですから。

なんかやばそうな技持つてるな・・・

でもとりあえずやった！デートの約束もできたし。とりあえず明日はシルバニアファミリーを実家に取りにいきたいから、3時くらいにお願いしてっと。頑張ろうっと！

恵美はまだこのデートが大変なことになんて知るよしもなかった。
いや、普通気付くけどね。

会いたくて震度3前編

「ただいまー」

突然連絡もなしに帰ってきた娘をみて驚く母親。ちょうど朝ご飯をつくっていたようだ。

エプロン姿でお出迎えしてくれた。

「あら恵美、どうしたのいきなり。しかも綺麗な格好しちゃって。彼氏でもつれてきたの？」

「違うよ、ちょっと忘れ物取りに来たの。でもその予想も近々あたるかもよー。」

ニヤニヤと気持ち悪い笑みを浮かべながら部屋にいく恵美。玄関入ってすぐ右にある階段をのぼり、懐かしのマイルームへ。

「あったあった。喜んでくれるかな？フフフ、限定ものだし、小さい時に買ったやつだからムスカ大佐さんは持っていないだろうし。」
ところどころにかぶっている埃を濡らしたハンカチでふきとり、外に向かい、大事そうに車の荷台にのせた。

「あら、本当に忘れ物取りに來ただけみたいね。朝ご飯食べていく？お父さん喜ぶわよ。」

「いや、急いでるからいいー。さっきお父さんにもあいさつすませたし。じゃあ、またくるね！」

愛車に乗り込み、CDを流す。今日の気分はだんご三兄弟無限ループだ。

ムスカ大佐さん、私の服装気に入ってくれるかな・・・それと、どんな格好でくるんだろう、楽しみ。

恵美は短めのブーツにニーソックス、紺に近い黒色の少し短めのス

カート、スリムタイプの胸元が少しはだけ、鎖骨の見える無地シャツ、モフモフした肌色の上着を着ていった。

昨晚メールのあとに一人ファッションショーで決めたものだ。他にも小物でリングとピアスをしている。ピアスは外そうか迷ったが、結局つけることにした。

団子三兄弟が130回目ほどのループになったとき、家についた。本当は直接向かおうとおもっていたのだが、香水をつけわすれたのだ。

首筋の腰元に軽く振りかけ、シルバニアファミリーを持ち、電車で集合場所に向かった。

30分前についてしまったが、私から誘ったんだ、またせたら悪い。近場の本屋などで時間をつぶすこともなく、そこで待機することにした。

集合時間の10分前になると、信号つきの横断歩道を挟んで、前方にムスカ大佐の顔が見えた。サングラスをかけているようだ。背が高いので人ごみでもわかる。首から下は人ゴミでみえない。

ああ、なんてカッコいいんだ。誰がみても美系。そして優しくて面白い（むりやりそう解釈することに昨日した）。最高の男じゃないか。無邪気に手をふってくる。恵美も軽くとびはねながら手を振り返す。しかし、目の前に現れたムスカ大佐を見て、恵美は驚愕することになる。

「ははは、見ろ、人がゴミのようだ!!!!!!」

そう大声で人ゴミで叫ぶムスカ大佐。いや、私も思っていましたよ、人ごみって。でもゴミのようだとは思ってません。

ムスカ大佐の服装は、紅いピッチピチのパンツ、茶色の靴、白のYシャツの上に紅い貴族を思わせるような上着、そして肌色のスカー

フを巻いて、髪型は七三だった。

そう、ムスカ大佐の完コスである。あまりの完成度にびっくり。

岡田君じゃないじゃん、ムスカ大佐じゃね？ いやむしろムスカ大佐本人だろ。

あまりの驚きに、声も出せない恵美。

「流行りの服は嫌いですか？」

声モノマネも完璧。セリフも。ムスカ大佐の声優はコイツだったのかというほどの完成度。

あせりを隠すために早口で恵美は言った。

「いや、そんなことない、すっごい素敵です！これ、約束のシルバニアファミリー。」

左手でもっていたシルバニアファミリーを差し出す。

「素晴らしい・・・これは僅かだが心ばかりのお礼だ。とっておきたまえ。」

そういつてチョコレート金貨と銀貨を私の手にむりやり握らせた。

「ありがとうございます！」

い・・・いらねー。ゲーセンでとってきたのか、これは。一人でクレーンゲームでチョコとって喜ぶムスカ大佐。想像するだけで死ぬる。しかもちよっと溶けてる。

とりあえず目的のデートに向かうことにした。最初は喫茶店だ・・・とりあえずちゃんとお礼をいわなくては。

会いたくて震度3後編

「いらっしやいまっふっwwwwww」

びしっときめた年頃の女性が接客にきてくれた。ムスカ大佐の格好をみて耐えきれず一度噴き出したが、すぐに持ちこたえた。ここは一杯800円という高級喫茶店。当然といっちゃ当然だが、一人でも友達ともこんなところにはもちろん来ようとすら思えない。

「二人です。禁煙席で。」

「かしこまりました。こちらへどうぞ。おきまりでしたらこちらのボタンで呼び出してください。失礼します。」

「何にしますか？」

「ふむ。」

ムスカがこちらを凝視してくる。怖い。けどカッコいいなやっぱ。イケメンはムスカでもイケメンだ。

「あ、ここはエスプレッソがおいしいって書いてありましたよ。」
「そういえば下調べしていたんだった。私って準備万端じゃないとダメなタイプなの。」

「ではそれを頂こう。」

「そういえばこいつ、店内でもサングラスはずさないのか・・・まあいい。正直恋心は少し冷めたが、痴漢から助けてくれたことは事実。誠心誠意お礼をしよう。」

そして注文の品をもって、接客をしてくれたウェイターがエスプレッソを運んできた。

「エスプレッソでございます。」

湯気とともに、気品感じる今までに嗅いだことのないようないい香りがしてきた。

「うわぁ、いい香りですね。」

「こちらは〇〇産の一日に20個しかとれない豆をつかってまして

」
ウェ이터が誇らしげに説明を始めた。するとムスカも動いた。誇らしそうに。

「たしかにいい香り。ふむ。これは僅かだが心ばかりのお礼だ。とっておきたまえ」

そういつて説明をしているウェ이터にチョコレート金貨銀貨を手渡す。

「あ……ありがとうございます。」

「気にしないでくれたまえ。王たるもの、当然のことだ。」

「し、失礼します。」

か……帰りにえええええ。しかももう王になったあとのムスカ設定かよwwwwwwwwwwしかし、昨日デートコースをいつてしまった。喫茶店、ボーリング、BARだ。まだそうはいかない。

「おいしいですね、エスプレッソ。」

「はは、そうだな。おっと、すまない、電話だ。」

「あ、はいどうぞ。」

そういつてカバンから馬鹿でかい電話をとりだす。何時代だよ。

「私はムスカ大佐だ。ロボットにより通信回路が破壊された。緊急事態につき私が臨時に指揮を執る。ロボットは北の塔の少女を狙っている。姿を現した瞬間をしとめろ。砲弾から信管を抜け。少女を傷つけるな！」

店内に響きわたる大声でムスカ大佐は叫んだ。店員があわてて飛んでくる。

「大変恐縮ですがお客様、店内ではお静かにお願いします。」

言葉は周りに気を使い怒っているが、顔は臨界点を突破しそうなほどゆがんでいた。ウェ이터も大変ですね。笑えよベジータ。

「すいません！」

しかし恥ずかしいので謝る恵美。ちょっとキモオタかなって思ってた私がバカだった。筋金入りの変態だよ。

「聞きたまえ店員、私の偉大な言葉を！！お会計だ！！」
「わかりましたからお客様wwwwお静かに願います！っふんぬwwwwwwwwww」

高らかな宣言、たえきれるわけもなくふんぬっといって消えていったウェイター。

逃げるように会計をすませ、ボーリング場に向かった。

ボーリング場で表示される名前、もちろんムスカだった。

そしてムスカは自分の番になると

「みせてあげよう！ラピュタのいかづちを！！」

と、わざわざ投げる前に顔だけこちらに向けて言っ、完璧なフォームでストライクをとる。

「はははは、見ろ、ピンがゴミのようだ！！」

この1セットを私は11回聞いた。となりにいたアベレージ250点はあるそうなセミプロっぽい人が泣いていた。いやだよね、こんなムスカにやられたら。

「そんな馬鹿な格好してるやつに負けるなんて・・・」

うわあ、心の声が聞こえるよ、てかいつてたよ。セミプロの人、ラピュタのいかづちで焼き払われるよ！。

すると泣いているセミプロに近づいたムスカ大佐は

「君のアホ面には心底ウンザリさせられる」
と耳元で呟いた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！」

また逃げるように飛び出る。まさか言いにくくとは。しかしあとはBARだけだ。あそこはショーがある。すこしは静かにしてくれるだろう。

BARに向かうと、おしゃれなお兄さんがでてきた。もちろん顔はゆがんでいる。笑いたいけどわらえないんだろう。かわいそうに。

笑っているんだよ。

「ただいま混み合っておりまして、少々お待ちいただけますか？」

「3分間だけまってやる。」

[illegible]

耐えきれずお兄さんが鼻水をだしながら噴き出した。ああ、イケメンなのに。

「態度をに気をつけたまえ。君はラピュタ王の前にいるのだ。」

両腕を腰にあて、えっへんポーズ。胸を張るな胸を。

「しつ　W　W　W　W　W　W　ぬふっ　W　しつ　れい　しました　W　W　W　W　W　すぐ　に準備

W　W　W　します　W　W　W　ぬふっ　W　W　」

軟体動物のようにクネクネしながら店に戻るお兄さん。ああ、3日は思い出し笑いに苦しむだろうな・・・

「あの・・・ムスカ大佐さんって何者なんですか？あと本名を知りたいです。だめですか？」

ずっと気になっていた。ただのイケメンニートではない。一体何者なんだ。名前は本当はなんなんだ。

「いいだろう。私は古い秘密の名前を持っているんだよ、リュシータ。私の名はロムスカ・パロ・ウル・ラピュタ。」

君の一族と私の一族は元々一つの王家だったのだ。地上に降りたとき二つに分かれたがね」

私の名前はリュシータじゃねえええええええええってかだめだ、完全に今日はムスカ大佐なんだ。なにいつても無駄。てかムスカ大佐だからもうムスカ大佐じゃん。

数分後、中に案内された。そこではダンサーとジャズプレイヤー達がショーをしていた。

「カッコいい！素敵ですね、ムスカ大佐さん。」

「素晴らしい！最高のショーだと思わなかね。」

「はい、思います！」

恵美はムスカとの会話に慣れてきていた。うしろで店員がまた嘖き出していた。

そして帰り道。ムスカと恵美は夜道を進んでいた。以外と会話ははずんだ。

「もうすぐ私の家につく。遊びにくるかね？」

「そうなんですか？でも明日朝はやくに用事がありまして……すいません。また誘ってください。」

疲れたのではやく帰りたい。ああ、ジャグジー付きのお風呂で
ゆっくりしながらキングベッドで眠りたい！白馬にのったイケメン
王子様こないかなあ。

「そうかね、残念だ。ではここでおわかれだ。私の家はここなんですね。楽しかったよ。札を言おうリユシータ。」

そういつて指さした先はこころへんで有名な金持ち、伊集院家の豪邸であつた。なんと家で白馬をかつている。もちろんジャグジーだしキングベッドだし、その他もろもろだろう。

マジかよおおおおおおお超金持ちじゃねえええええええか
 ああああああジャグジーとキングベツトどころのさわぎじゃな
 いだろこりやあああああ

「それでは失礼。」

「ま、まって!! やっぱいいってもいいですか?！」

「ふ、もちろんかまわないよ、歓迎しよう。しかし用事があるので
は？」

「あ、そういえば・・・明日、明日の夜いってもいいですか?！」

「もちろんだ、紅茶を用意しよう、それではアディオス。」

「お帰りなさいませ、おぼっちゃま」

「ただいま W W W W W W W W W W 今日のは楽しかったでござる W W W W」

「おぼっちゃまに言われたとおり、草津温泉をまるまるもってきておきましたよ。」

「うは W W W W W W ? クス W W W W W W W W W W」

かっこいい。金持ちだと思った瞬間貴族の格好でも許そうと思った。むしろ最後の私との会話なんて紳士じゃないか。

それとニートな理由がわかった。親が超超金持ちなんだ。それに格闘技も素晴らしい（アニメだけど）し、ボーリングもできる。きっとやろうと思えばなんでもできるんだろう。天才型ってやつだ。みつけた、私の白馬にのった王子様。

会いたくて震度4

家について風呂に入りながら早速ムスカ大佐、いや、王子にメールをはじめ。それにしてもやはりアパート、狭い風呂だ。防水携帯をいじりながら自分の貧乏さに吐き気がする。ああ、セレブになりたい。

件名

今日はとっても楽しかったです！

本文

お疲れ様ですー、今日はありがとうございました（ハート）

髪型も服装もきまってましたね、まさにムスカ大佐でした（笑顔絵文字）

また行きたいです（二重ハート）

あ、シルバニアファミリーは気に入ってきただけでしたか？（ドキドキ）

私の思い出の品なんで、かわいがってあげてくださいね！

件名

グリフィンドーロール！！てってれーてーWWWWてってれーてWWWWてってれーてーれーてーWWWW

うっひゃ W W W W W W W W W W
アアア アッ シュ W W W W た ま ん な い W W ス プ ラ ア ア ア ア
ざるよ おお おお おお W W

今度はムスカ大佐様じゃないコスをおみせするでございする W W
W どうふ W W W W おふ W W W

僕も是非行きたいでしゅ
W W W W W W W W W W

素敵、抱いて！！湿る股間を感じながら、キングベットで岡田君に抱かれる妄想をする。いい、よすぎる。

組み分け帽子ですね、グリフィンドールおめでとうございます

本文

気に入っていただけて嬉しいです。大事にして下さいね（キラキラ）

明日は6時ごろ向かってよろしいですか？（笑顔）

ここはがつつかずにいこう、冷静になれ、素数を数えるんだ恵美。

件名

いいえ、ケファイアです

本文

来ていただくのに迎えをよこさないわけしないでござろう！家まで行くので、6時に家の前でまっ待っていてくだされ。エヴァ初号機で迎えにいきますお。お。お。お。お。お。

会いたくて震度5前編

目覚ましが10度目の雄たけびを上げた。

そろそろ11時、起きてやるか。

いやあ王子様と今晚デートだと思うと、私の女という女が騒ぎだしてとまらないわ！

とりあえずパンツ汚れてるし、お風呂にはいろうと。

今日は特別に……薔薇の香りのバブーいれちゃう！セレブ、私セレブだわ。なんと2個いれちゃう。惜しげもなく2個も。こんな狭い体操座りしないと全身入らない浴槽なのに。

そしてすぐお湯溜まる。もうエコ。さらに浴槽半分くらいのお湯で、あとは私の体積によって満たされる浴槽。

軽く体を流し、そつと足先から入るとみせかけてダイブ！

「んぎもぢいいい
いいいいのおお
おおおかしくなっ
ちゃううううらめ
ええええええええ
えええ」

おっと、お隣の童貞苦学生が私のことセレブビッチだと勘違いして襲ってくるかもしれん。変な声上げるのはよそっと。

足の爪の間から、耳の穴までくまなく洗い流す。股はいつもの3倍洗いました。完璧だわ。

そんなこんな、めくりめく妄想をひろげながら風呂を終える恵。冷蔵庫に向かい、ペプシネクストに手を伸ばす。腰に手をあて、グビグビと。

「つぶはあ、G O、N E X T！ってあたしはブルーローズか！きやははっ」

最近見てるタイガー&バニーというアニメのキャラのマネをして一人ノリツツコミする独身。なんとも悲しい絵だろうか。

しかし冷蔵庫を開けたときに食材がないことに気付いた。朝兼昼飯を買いにいかねば。

サンドルをはき外に出る。

「よくねむれたかな？」

いた。

ムスカが。いつもの名言をしやべりながら。顔はあきらかに怒っている。え、なんで？

「よくねむれたかな？と、聞いている」

「え、あはい、おはようございます……」

「いいたいことはそれだけかね」

どうしようこんな怖いムスカさんみたことない。やばい、撃たれる。

「帰るとしよう。君とはもう会うことはない。サラダバー」

そういつて帰ってしまった。私何かしてしまっただろうか。

昨日のメールと彼の言葉を思い出す。

家まで行くので6時に家の前でまっ待っていてくだされ
よくねむれたかな？

ま

か

さ

朝の6時からずっと待ってた?!？

やっちゃまった!! ていうかおかしいだろ6時集合とは確かにいったけど常識的に考えて18時集合だろおいしいおいしいいいいいいい、やばいやばいやばいやばいとにかく電話して謝ろう!

出ない……完全にぶちぎれてる。そりゃそうだ、ムスカさんからしてみれば、私から6時に集合といわれて、ちくしょう今から寝ても準備の時間いれてほとんど睡眠時間とれないじゃないかあの雌豚っ
て思いながらもちゃんと約束の時間にきて、あげく家の前で5時間

も待たされたのに、私からのお詫びの言葉のひとつもないときたもんだ。殺されなかっただけマシだ。とにかくメールしてみよう。

自然と涙があふれてきた。セレブへの道が絶たれるかもしれないことではなく、申し訳ないことをした、という罪悪感から。

件名

読んでくれると嬉しいです

本文

ムスカさん本当にすいません。6時と自分でいつてたんですが、18時のつもりでした……。

夜までメールつき合わせてしまったのに、ずっと朝から待っていてくれてたんですね。。

私の説明不足です、本当にすいませんでした。

できることならあってお詫びがしたいです。本当にすいませんでした。

返信いつまでもお待ちしています。

私なんでこんな口下手なんだろう、ぜんぜん謝りたいって気持ち文章にならない。

最後メンヘラみたいだし。うわああああん

ずっと布団で携帯を握り締め泣いていた。太陽が沈みかけたころメールがきた。

件名

Re..読んでくれると嬉しいです

本文

18時に私の家で。

よかった。ただひたすらにそう思った。返信がこなかったら私は永遠に布団の中だったかもしれない。服も髪を顔も整えず、すぐに家を飛び出した。サンダルで。

会いたくて震度5後編

30分前についた恵は電波時計の時間が調度18になったことを確認し、インターホンを押した。

少し待つと、執事らしき人から応答があった。

少々お待ち下さい、といわれたあとに、「お待ちしております」と声が聞こえ、そのあとすぐに、大きな門がゴゴゴゴと音を立てながら開き、玄関までの長い道が現れた。

小さい車が迎えにきて、玄関まで案内される。

入り口にはさっきと同じ声をした執事が待っていた。

「恵様、ようこそおいでくださいました。ぼっちゃまがお待ちです、こちらへどうぞ」

恵はすぐに後悔した。自分が来てしまった格好を、だ。

うつすいワンピース一枚、もちろん下着は着ていない、それでサンダル。どっかの娼婦だってもっとマシな格好で客を招きそうだ。広い玄関を出て、室内にある螺旋階段を上り、中央にある部屋の前にたどり着いた。

「こちらでございます」

執事がそういうと、ドアをコンコン、と二回ノックし、失礼します、といった。

大佐からの返事はない。しかし執事の手によってドアは開かれ、「どうぞ」と、中に入れられた。

そこには、魔王が座ってそうな椅子にドシンと座り、足を組んでいるムスカ大佐がいた。

広い広い部屋の周りには、フュギュアやポスター、漫画にライトノ

ベル、DVD、ブルーレイ、巨大液晶テレビ、各ゲーム機、PCが4種類おかれている机があり、その中央に椅子を置き、こちらを見据えている。

「あの、ムスカ大佐、私――」

「言い訳は聞きたくない、まずは謝罪の意思と誠意を見せてもらおう」

圧倒的存在感と、重みのある言葉。普段のふざけているムスカ大佐とは大違いだ。

やはり名家の長男、すさまじい教育を受け、威厳を手に行っていると、いうことがヒシヒシと伝わってきた。

恵は土下座した。魔王の席に座っている男と、キャミソール姿の女の土下座。

「大変申し訳ございませんでしたあ！」

大きくりきみ、腹から声を出したせいか、ブフウっ、と屁が出てしまう。

しかしムスカ大佐は笑うことはせず、ただひたすらに視線を送っていた。

「誠意は伝わったよ。では理由を聞かせてもらおうか」

少し言葉の棘が減った気がした。恵はここぞとばかりに言葉をつむぐ。

「6時集合だったので、18時集合だと思ってました！」

意味がわからなかった。

「6時集合なのになぜ18時集合だと思ったのだ？ 大体6時集合

といったのはそなたであろう」

「すいません、勝手に6時集合といえば18時集合だと思い込んでいました、申し訳ありません」

ムスカはどんな言い訳だ、と思ったが、ぐずぐずと泣き続ける恵を見てこれ以上責める気がなくなってしまった。しかし、こんな愚弄を受けたんは人生初めてだったムスカはすぐに許すことは出来なか

った。

「もうよい、帰っていいぞ」

はっ、と頭を上げ恵は何度も謝ったが、ムスカが指をひとつ鳴らすと、執事が現れて強制的に家からつまみだしてしまう。

全然正気じゃないけどこれは許してくれたってこと？やった！やったやった！！

追撃だ！このチャンスを逃すわけにはいかない！

件名

もう許してくれないかと思ってました

本文

本当にすいませんでした アセ絵文字
もしよかったらもう一度デートしていただけませんか？

抱いてゲットしてやる！私処女だけど！！大丈夫！！知識はAVで
知り尽くしてる。うんこ食べればいいんでしょ？まかせといて。

件名

徒然なるままに吐き散らした僕の嘔吐

本文

もちろんいいですよん^^
では明日の午後6時に迎えにあげます。よろしいでしょうか姫？

姫だってキャーWWWもううんこ食べまくってやるわ。あなたが
泣くまで！うんこを食べるのを！やめない！！

件名

嘔吐ふいておきますね。フキフキ

本文

ありがとうございます！

18時に、まっています！

やっふうううううううううい。たまんねえぜ。予習で自分のうんこ食っておこうか。いややめとこう。

会いたくて震度7

もう一度風呂に入り、化粧し、髪も　ゆるふわ☆パーマ　にし、香水を吹きかける。

完璧。360度どっからどうみてもいい女だわ。17時30分に、玄関前に立ち、到着を待つ。前回の失敗から考え、待ててはいけないと考えたのだ。私って出来る女。

案の定ムスカは45分ごろに到着した。時間に厳しい男だ。運転手の手により、玄関に向かって赤い絨毯がひかれる。後部座席のドアが開き、ムスカがエスコートしてくれた。

「昨晚の非礼を許してくれたまえ」

「いえ、私がいけなかったので……」

後ろを振り向くと、レッドカーペットに恵の歩いた汚い土の跡がついていた。

「のりたまえ」

「はい」

Sクラスベンツである。推定160万、シルバーの可愛い顔したアイツに、今私は、乗る！テンションは最高潮に達してきた。ムスカも車に乗り込み、運転手が絨毯をすばやく丸め、車を走らせる。恵は何度も何度も生唾を飲み込んだ。ごくごく飲み込んだ。そしてすぐに到着する。

何度みてもすっぱー家！前回お邪魔したときはそれどころじゃなくて観察など出来なかったが、あらためてすんごい家だということを痛感する。玄関で靴を脱ぎ、団欒部屋のようなところに通された。長い机の上に、数々の食事が並べられている。食べたいものを食べたいだけ食べる、バイキング形式だ。お皿とフォークを渡された。

「さあ、好きに食べるが良い。今日は君が主役だ」

主役！私が主役！人生初の主役！

「はい、いただきます!」

舌がとろけてなくなるかと思うくらいうまかった。

「どうだね?」

「こんなにおいしいもの初めて食べます」

そういうと、そばでずっとたっていたおじさんが、「ありがとうございます」
ざいます」といった。

ひとしきり食事を楽しんだあと、ムスカの部屋に通された。昨日私が土下座して屁こいた部屋だ。

魔王の椅子が二つ用意してある。私の分だ。座ってみると想像を超えるフカフカ具合。ここは天国だった。ムスカがボタンを押すと巨大スクリーンが出てきた。

ああ、これから甘いラブシネマを二人でみて、そしてうんこを食い合うんですね、わかります。

「さあ、はじめようではないか」

そういつてはじまったのは、天空の城ラピュタだった。目をキラキラと輝かせている。

「この映画を何万回と見たことか……」

2時間強にわたる作品の中、ムスカは画面のムスカとまったく同じ声、同じ抑揚でセリフを言っていた。ここまでくると尊敬する。

「すばらしい作品だと思わんかね」

「はい、思います」

私はもう我慢できない!! あなたと二人きりになった時点で、下半身はビチヨビチヨなのよ!!!

恵の理性は吹っ飛び、ムスカを押し倒した。

「ムスカさん、私、もうっ」

キスしようとしたが、避けられた。オモチャを奪われた子供のよう
な顔をして、つぶやく。

「あなたもそうなんですネ、恵さん……女の人みんなそうです、
僕のことを襲うことしか考えていない」

「え?」

「みんな僕を襲います。もう現実の女性は信じられなかった。だからアニメに酔いしれた。そこで出会ったのが、恵さん、あなただったんです。キモオタの僕に、とことんついてきてくれるその姿勢。まっすぐな謝罪。僕のことを本当に愛してくれているのかと思っていたのに」

ムスカは机の引き出しから、箱をとりだし指輪をみせた。

「本当は、今日付き合ってくださいというおうとしてました。けど、あなたも結局僕の体とお金が目当てだったんですね」

凶星である。一切否定できなかった。子供を宿して結婚にありつこうとまで思っていた。

「何もいいませんか。泣き喚くかと思ってましたが。もうあなたの顔はみたくない。出て行ってください」

「はい……。失礼しました……」

恵は、最後に、「今までありがとうございました。楽しかったです」と告げて、部屋を出た。返事はなかった。ひどく肌寒い帰り道だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9168o/>

キモオタを好きになった私

2011年10月8日08時06分発行